

2018年9月13日(木)、ミニ講演会『「道徳」をけっとばせ』の講演内容まとめ（後編）です。

それでは後半のお話をしていきましょう。

2、実際に「道徳」の教科書を読みましょう

まずは実際に今現在小学校で使われている「道徳」の教科書を読んできていきます。



数社から道徳の教科書は出版されていますが、どの出版社のものも大体内容的には似通っています。今日見ていくのは文科省配布の「わたしたちの道徳」です。

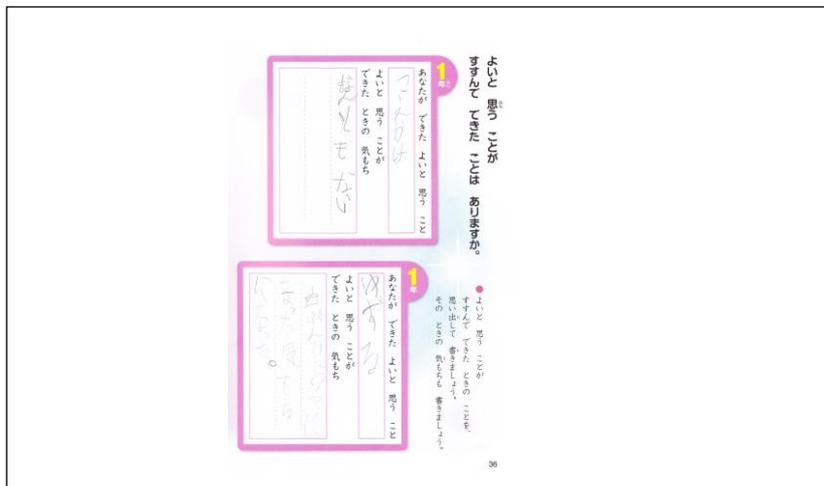
文科省配布
「わたしたちの道徳 小学校1・2年」

p38～ ぽんたとかんた

実はこのお話が、私が「道徳」について考えることになったきっかけのお話です。うちの次男が宿題でこのお話を音読していて、なんとなく聞いていたところ、最後の結末に衝撃を受けたのです。どんなお話を要約すると…仲良し友達のぽんたとかんた。ある日、「入ってはいけない」と言われている裏山に秘密基地を見つけたと言って、かんたがぽんたを誘ったところ、じっと考えた後、ぽんたは「ぼくは行かないよ」と言って誘いを断りました。そう言われてかんたも「ぼくも行かない」と言ってふたりで公園のブランコで遊びました。というお話です。

行かない理由として「だってあぶないから」とか、「自分で考えてきめた」などという言葉もありますが、この

お話をしっかり読み込むと、明らかに「入ってはいけないと言われたから」入らなかった、ということは明白です。実際に何かを経験して危険が分かったわけでも、本当の意味で考えたわけでもありません。ここで言う「考えた」は、「守れと言われたことを守るか破るかどっちにするかを考えた」に過ぎません。だって危なかった経験はまだしていないのです。「あぶないから」というのは「あぶないと言われたから」ということです。そんなことでは子どもは育ちませんし、「言われたからそうする」というのは本当の道徳ではありません。わざわざこの物語を教科書に載せるということが私には解せません。



次はこのページを見てみましょう。

よいと思うことがすすんでできたことはありますか。というページです。自分のできたよいと思うことを書く欄があり、その時の気持ちを書く欄があります。これは次男の教科書なので、実際に書き込んでいるのを見てみましょう。

最初に書いてあるよいと思うことは、「こえかけ」とあります。何の声かけかはわかりませんが、誰かに何かを伝えたのでしょうか。そしてその時の気持ちは「なんともない」です。まさにこれが本当の意味で道徳的な人の気持ちでしょう。自分にとって特別なことではないから「なんともない」のです。これを見て、この子が今まで育ってきた道筋は間違っていないと思いました。

問題はその後です。おそらく最初の記入からしばらく経った後に書いてある欄を見てみましょう。よいと思うことは「ゆずる」とあります。そしてその時の気持ちは「自分がおやくにたった気もちになった」とあります。なんでしょうこのとってつけたような薄っぺらい言葉は。1年生にして「先生が正解をつける答え」にシフトしている様子がよくわかります。これは非常に反道徳的な行為ですね。ある意味ウソをついているのですから。このように道徳の授業は使いようによって反道徳的な人を生み出してしまうというパラドックスが生まれるのです。

文科省配布

「わたしたちの道徳」

1・2年p42～ してはならないことがあるよ

3・4年p128～ みんなが守らなくては
ならないきまりがある

・答えが最初から決まっていること、まるで天から与えられていることのように錯覚させる危険性

・根本的な疑問を抱かせないづくり

「相手の立場に立って考えてみよう」とは言うが、ルールとは何か、何のためにあるのかを考えさせないかがわしき

次はこういうページを見てみましょう。1・2年生版、3・4年生版にそれぞれあります。社会の場でははい

けないと思われている当たり前のルールについて書かれています。例えば「うそをついてはいけません」「いじわるをしてはいけません」「悪口を言ってはいけません」「ひきょうなことをしてはいけません」「人をきず付けてはいけません」「ごまかしたり、うそをついたりしてはいけません」「弱い者いじめをしてはいけません」などです。

パッと見はただ当たり前の事が書かれているだけですね。何が問題なのでしょう。それは、ただ教訓的な事が書かれているだけであって、「なぜ」という理由、「こういう場合は」という具体性、「ルールは何のためにあるのか」など、決まり事があること、そのルール自体について根源的に考える機会が全くないということです。まるでここに書いてあることは何の疑いもなく守らなければならないこととして書かれています。もちろん一つ一つが大切なルールです。しかしそれは「守らなければいけない」という意味で大切なのではなく、「一つ一つを考えることが平和な社会をつくりだす」という意味で大切なのです。考える機会を奪ってしまっている今現在の道徳の授業や教科書でそこまで深い考察ができるとは到底思えません。

少し話はそれますが、ここに書かれている内容と今の政権を交互に見てみると、非常におかしい事実に気付きます。現政権が強固に進めてきた教育改革によってこういうページもあるわけですが、現政権の姿はどうでしょう。(このまとめを書いているのは2019年2月です。書いている現在の状況で述べてみたいと思います。)森友学園事件に関わっていたら辞任すると言った首相、未払いの年金問題で最後の1人まで見落とさず払うと言った首相、様々なわる疑惑で選挙後丁寧な説明をしますと言った大臣、辺野古のサンゴは移植していますと言った首相、数々の文書廃棄や隠滅・隠蔽、賃金統計などの改竄・ねつ造、全部「ごまかしたり」「うそ」をついています。言い出したらきりがなく「うそ」「ごまかし」のオンパレードです。沖縄に米軍基地を押し付け、さらに新しい基地を沖縄県民の明確な反対の民意を無視して(法律も無視して)強引に工事を進める、原発事故で苦しんでいる被災者の支援を一方的に打ち切る、生活保護の受給額を引き下げる、まさに「弱い者いじめ」をしています。韓国や北朝鮮にはなぜか強気に出て悪者扱いする、選挙の際には相手候補を陥れるデマを流す、「悪口」を言いまくります。マスコミが政権の都合のいいように動くよう恫喝する、お金(もちろん税金)を使って抱え込む、まともなジャーナリストは様々な妨害で排除しようとする、「ひきょうなこと」をしています。この日本で「道徳」の授業を一番しっかり受けないといけないのは現政権の面々であることは間違いありません。自分達が全くできていないことを他の国民に要求するというのはどういうことでしょうか。おそらく「自分たちだけは許される特権階級だ」という意識があるのでしょうか。とんでもない話です。

文科省配布
「わたしたちの道徳 小学校1・2年」

P124～ 黄色いベンチ

閑話休題、次に行きましょう。

「黄色いベンチ」というお話です。男の子二人が雨上がりの公園に遊びに来てベンチの上から紙飛行機を飛ばします。ベンチには泥がつきます。その後ブランコに乗っている時に女の子とそのおばあちゃんが遊びに来て、ベンチに座った女の子のスカートに泥がついたので、おばあちゃんが「スカートがどろだらけよ」と言います。その様子を見ていた男の子たちがはっとして顔を見合わせる場所でお話は終わりです。

これもまた「道徳」に載せるべき話なのかどうか疑問符が付きます。男の子たちがした行為ははたして反道徳

的な行為なのでしょうか。私には元気な男の子たちの姿としては至極まっとうな気がします。おそらくは1, 2年生でしょう。それくらいの子が楽しく遊んでいる最中に靴の泥が周りに与える影響を慮った上で遊んでいたとしたら、私はその姿の方が違和感があり、育ちを心配してしまいます。もちろん、「あ、女の子にわるいことしちゃったな」という気付きをすることは悪い事ではないでしょう。しかし「道徳」の教科書にわざわざ載せるほどに重要なことでしょうか。むしろこのような話を載せることで「おとなしくしなければいけない」という強迫観念を植え付けることにつながらないでしょうか。子どもが子どもらしくあることは実は健全に育っていく上でとても大切なことです。やりたい放題はもちろんいけません、羽目を外す自由や失敗できる自由は育つうえで必要です。この話が帰結するものはそういった子どもらしい自由を奪ってしまいかねないという内容だと思います。

文科省配布
「わたしたちの道徳 小学校3・4年」

P124～ 雨のバス停留所で

次は3・4年生版、「雨のバス停留所で」というお話です。おそらく3・4年生の女の子よしこさんとお母さんがバス停に来たら、雨が降っているのを待っている人たちは側のタバコ屋の軒下にいます。バスが遠くに見えたのでよしこさんはバス停の一番前に並びます。するといつもはやさしいお母さんが非常に強い力でよしこさんを自分の側に引っ張りました。結局他の人よりも後に乗ったよしこさんたちは座ることができません。お母さんは怖い顔で窓を見つめながら無言のままお話は終わりです。

何が言いたいのか意味不明です。よしこさんはルールにのっとりちゃんと並んで乗ろうとしたのに、訳も分からずその行動を否定されています。もしかしたら自分達より先に来ている人たちがいたのだから自分達は先に乗ってはいけない、ということをお母さんは言いたかったのでしょうか。はっきり言ってそれは普遍的な「道徳」の問題ではないですよね。百歩譲ってそれが世間的な常識だとしても、果たしてここまでヒステリックになるほど悪いことをしたのでしょうか。「私たちは後から来たのだからちょっと待って乗みましょう」と言えば済むことでしょう。訳が分かりません。このお話を真面目に受け取った子は、世間体や空気感というものを「絶対に守らなければならないもの」として理解するでしょう。やはり変な強迫観念を植え付けるトンデモ教材だと思います。

文科省配布
「わたしたちの道徳 小学校5・6年」

P28～ 自由は「自分勝手」とはちがう

次は高学年、5・6年生の教科書です。「自由」について学ぶページが10ページにわたって展開されています。その最初のセンテンスの見出しが「自由は「自分勝手」とはちがう」なのです。いきなり否定の定義から入って

います。これはどちら側からの視点かということが分かると思います。明らかに管理する側からの視点が強いのです。

自由について話し出すととても深い話なので時間がいくらあっても足りません。(詳しく考えたい方は、季刊まいづるで特集した内容をページにあげていますので、どうぞご覧ください。「自由って何だろう」<http://www.seinan-gu.ac.jp/youchien/care/useful.html>) その中でも切り詰めて述べてみます。実は今現在の概念で言う「自由」とはそんなに歴史の古いものではありません。中世の支配被支配の歴史の反省を受けて成立した近代憲法で、ようやく誰にでも保障されるものという理解が進んでいったのが、今現在使っている「自由」の概念なのです。

そういった「自由の保障」の説明や「自由」についての丁寧な定義もなくいきなり自由を否定するようなセンテンスから始まるなんていうことは、保証されるべきものである「自由」というものを貶めているやり方です。統治する側にとって都合のいい理解で進めようということがありありと分かります。その後のお話のページでも、自由＝わがまま、という薄っぺらい図式の物語で、読んでいるとため息しか出ません。

文科省配布
「わたしたちの道徳 小学校5・6年」

P58～ 江戸しぐさに学ぼう

江戸しぐさという言葉聞いたことがあるでしょうか。人々が互いに気持ちよく生活できるように生まれた行為で、江戸時代から伝わるものだそうです。「かた引き」「こぶしうかせ」「かさかしげ」「おつとめしぐさ」などという内容があるようです。その江戸しぐさの説明のページがわざわざあり、それに学びましょうということらしいですね。

さて、このページのどこが問題なのか。実はこの江戸しぐさというもの、昭和時代の現代人「芝三光(しばみつあきら)」という人物が考案してつくりだしたものであるということが明らかになっています。つまり(現政府もお得意の)ねつ造ということですね。江戸時代にはなかったものをさもあったかのように堂々と教科書に載せるというのは一体どういう神経の持ち主なのでしょう。 (文部科学省発行の教科書です。) これは江戸しぐさの内容がいか悪いかの問題ではありません。偽りを偽りと知った上で子どもたちに教えるというのはモラルに反している行為ではないのでしょうか。自分の都合のいいように事実を捻じ曲げるといえるのは、「南京大虐殺や従軍慰安婦はなかった」などと言う歴史修正主義の危うい思想とも結びつく重大な問題の一つと言えるでしょう。

文科省配布
「わたしたちの道徳 小学校5・6年」

P126～ きまりは何のために

次に見るページもまた噴飯ものです。決まり、権利、義務などといった問題を考えさせる物語なのですが、学

校でうまくいかなかった子どもたちを気づかせてくれたのが「国会議事堂への見学」だった、という物語なのです。もうどこから突っ込んでいいものやら困りますね。近年の国会議事堂で行われていることを思い返してみましょう。数の力に任せた強行採決。出された質問にまともに答えようとしない各大臣。国民にはほぼ知らされることなく大量に通る法案は社会的弱者をさらに貶める法律ばかり。ニヤニヤしながらバカにしたようにヤジを飛ばす現首相。などなど。国会をしっかりと見ていれば、ここからポジティブなメッセージを得ることなど到底できません。かろうじて野党の質問や演説から、リーダーとはこういう人と言うのだ、ということを読み取れることくらいでしょうか。むしろ国会議事堂は「弱者は助けねばならない」という社会的なルールを一番に破っている場所ではないですか。

小学生5・6年生にはこの教材で学ばせる前に、編集無しの国会中継をまずは見せるべきでしょう。

というわけで、教科書からピックアップしていろいろなページを見てきました。まだまだ突っ込みたいページはたくさんあるのですが、時間がないのでこれくらいにしておきます。道徳の教科書について最後にひとつ。実は道徳の教科書は家庭に持って帰らないことになっている学校が多いようです。学校に置きっぱなしにしているのです。「この本の使い方」のひとつに「お家の人と一緒に」と書いているにもかかわらずです。なぜでしょう？詳しく話をきいてみないと分かりませんが、私のように「道徳」自体に疑問を持つ親も多いでしょうから、余計なちゃちゃを入れて欲しくない、ということでしょうか。だとしたら姑息としか言いようがありませんね。いずれここも追及してみたいところです。

- ・与えられたきまりに疑問なく従う
- ・ある理想の姿という枠に収めようとする
- ・自由よりも責任、権利よりも義務に重きを置く

↓

「特別の教科 道徳」の目的とは何か

今まで見てきた道徳の教科書の内容から、それを作った側の目的が透けて見えてくると思います。どういうことか分析してみましょう。

まずは「与えられた決まりに疑問を持つことなく従う」人を良しとする、という内容がありました。その「決まり」はまるで天から与えられた自明のことであるかのような表し方でした。そして「ひとつの理想の姿があり、そういう人になる」ことを良しとする、という内容もあります。100まで言われなくても察する姿、奥ゆかしい姿、父母を敬う姿、我慢する姿、人のために自分を犠牲にする姿、夢や希望を持っている姿、などなど。江戸しぐさもそういう内容でしょう。LGBTや外国籍、2世3世系の日系人、単身親世帯、その他様々な背景を持ったマイノリティの人々は視界に入っていないような記述です。そして「自由よりも責任が大事、権利よりも義務が大事」という内容です。まるでそれらがセットであるというような書きぶり、自由・権利というものは制限付きで与えられているのだ、という理解を進めようとしています。

さてこれらの内容から導き出される目的は何でしょう。まさしく前編のまとめで書いた戦前の修身の目的、「国家に反抗せず、国家を愛し、国家が定めた方針に国民一体となって付き従う心証を植え付けるため」ではないでしょうか。ある一つの姿を提示し、その姿になるように仕向けていくやり方は、その目的を表しているように思います。では何のためにそういう目的を設定したのでしょうか。修身は明らかに戦争を意識してつくられていました。今現在はさすがに物理的な戦争を望んでいるわけではないでしょう。では「道徳」を設定した人々（一部の政治家、官僚、財界人）は何をねらっているのか。これも全編のまとめで書きましたが、内田樹さんが看破し

た「愚民化政策」でしょう。詳しく述べると、「同質的な小粒のイエスマンを大量生産」し、「国民資源をどれだけ私財に付け替えるか」を命題とした政策です。権力は財力とセットになっています。権力を持っている側がその権力を恒久的に維持していくために設定されたのが「特別の教科 道徳」なのではないでしょうか。(ただし、そのやり方は破たんすることが目に見えています。なぜなら「道徳」の授業によって反道徳的な人が増えることによって社会は少しずつ立ち行かなくなっていくだろうからです。行きつく先はポピュリズム、そして独裁体制でしょう。もしかしたら独裁体制を目的としているのかもしれませんが。)

少なくとも「本当の意味で道徳的な人」を育成するためではない、と断言できます。それでは「本当の意味で道徳的」とはどういうことを言うのでしょうか。

3、本当の道徳とは

手がかりになるのは、
哲学、倫理学、社会学

もともと道徳というものは、市井の人々が好き勝手に言い合うものでした。所謂おやじの人生訓みたいなものです。だからその国、地域、家族、そして一人一人が自分なりの道徳観を持って生きているのが普通です。つまり、道徳的な価値観は人によって異なる、というのがまず大前提としてあります。だからこそ、道徳というものは他の教科と同じようには教えられません。各学問のように真理や体系があるものではないからです。本来は自分で考えて自分なりの道徳観を身に付けていくものでしょう。大人ができるとしたら、一緒に考えること、話し合うこと、良いと思っていることを伝え続けること、くらいではないでしょうか。つまり「道徳教育」という言葉自体が最初から破たんしている言葉なのです。

そうは言ってもよき道徳観を自分の中に持つことはよく生きていく上で大切なものでもあります。それを考える時に役に立つのが、学問としても確立されている「哲学」「社会学」「倫理学」でしょう。(「倫理学」は宗教的な側面もあることを踏まえたくえで) もちろん、各宗教も道徳観と大きな関わりがありますが、今この場で考える上では極力宗教観を入れずに論じてみたいと思います。

道徳について考える目的は？



共同体の平和、社会の平和、世界の平和
(積極的平和)



平和はシステムによって成るものではない
また与えられるものでもない
社会の構成員の心構えによって更新され続けるもの

上記で論じた「愚民化政策」としての「道徳」ではないとしたら、本当の道徳の目的とはなんでしょうか。もちろん一人一人が「よく」生きるためとも言えますが、「道徳的によいこと悪いこととは何か」「道徳的な人とはどんな人か」を考え続けることによって導かれるのは「世界平和」と考えます。自分を含め誰一人としてないが

しろにされず幸せに生きていける世界が(現実には難しいとしても)理想である、という考えは否定しがたいと思います。そこを目指す道筋こそ道徳ではないでしょうか。(現代になり、世界から距離的な隔たりが次第に消えてきました。飛行機、メディア、ネット。グローバリズムが進むことにより、物理的にも地球の全てはつながっています。地球上の虐げられている人々と関係性を持っていることを前提にすれば、やはり現代の道徳には世界的な視点も考慮に入れなければ、それはまやかしだと思えます。)

そして平和とは誰かから与えられたものではなく、一人一人が求めた先にあるものです。一人一人が平和とは何かを考え、平和を願いそのように行動することで初めて実現していける社会の状態ではないでしょうか。その時に気を付けたいのは、「道徳」の教科書によくある物語のように、自己犠牲を美しいものとして良しとするのではなく、あくまで自分を含めたうえでみんなが幸せになることを目指すべきだと思えます。自分の権利を大事にすることはそのまま他の人の権利も大事にすることにつながるだろうからです。

私たちの社会は、支配と被支配、植民地と被植民地、覇権主義・帝国主義の長い中世の時代を経て、その反省をもとによりやく民主主義の時代へと移りました。それまでの人間関係が上下関係を基本としてきたのに対し、近代的民主主義観では皆人権を持った平等の関係であるという横の関係を基本とする時代です。そういった現代における「本当に道徳的な人」とは、「成熟した市民」のことであると私は考えます。

成熟した「市民」とはどのような者か

- ・自分には権利があることを知っていると同時にすべての人に同じ権利があることを知っている
- ・自分は社会を運営している一員であると考えている
- ・社会の持続を考えて行動することができる

成熟した市民とはどういった人のことを指すのか。まずはこの社会の成り立ちを知っている必要があるでしょう。この社会は最初から今の形ではなく、先人たちがたくさんの犠牲と努力の上で積み上げ私たちに受け渡してくれたものです。

人は皆人権を持った存在であるという理解があること。自分の権利を守ると同時に、自分以外の人全員が同じ権利を持っており、同じように大事に守ろうと思っている人。そのように考えている人は、弱い者をさらに貶めたり、自分だけが得するような卑怯な行為をしたり、弱い者が虐げられているのを見て見ぬふりをしたりすることを良しとはしないでしょう。

そして政治や社会といった身の回りのことに関心を持ち、自分は社会を運営している主権者の一員であると考えていること。「まかせて文句ばかり言う」構えではなく、「考えて引き受ける」構えを持っているということ。そういう構えを持っていれば、もし社会がうまく回っていない時に、何とか変えようと自分のこととして考えることができるでしょう。おそらく積極的平和の一番の敵は反道徳的行為ではなく、社会的弱者に対する無関心、人の痛みに対する無関心ではないかと思えます。社会的問題は誰かの責任ではなく、まず自分(たち)の責任であるところから積極的平和への道は始まるのではないのでしょうか。(積極的平和とは、“戦争や争いのない状態”を指す“消極的平和”とは違い、“社会構成員の誰一人として虐げられていない状態”“公平性が守られている状態”を指します。つまり、格差社会、貧困のある社会、社会的弱者がそのまま助けられていない社会は本当の平和とは言えない、という考えです。ちなみに一時期使われていた“積極的平和主義”とは、積極的平和とはまったく真逆の考え方、つまり＝“積極的戦争(武力攻撃)主義”のことです。お間違えのないよう。)

最近の「豊かさ」の研究では、単純に GDP だけでは測れないという考えが主流です。経済的成長だけを追い求めれば、いつか世界は破たんすることは自明だから、そんなものは本当の豊かさとは言えない、というこ

す。そこで注目すべき観点が「社会の持続性」です。子ども、孫、そのずっと先まで幸せに暮らしていける社会かどうか豊かさの大切な視点なのです。新自由主義の弊害が明らかになった形ですね。それを分かった上での行動であれば、自分や家族さえよければいい、というふうにはならないでしょう。おのずと自然や資源の大切さにも目が向くでしょう。そして自分の暮らしの裏側で搾取されている(まわりまわって考えれば自分が搾取している)人々がいることも良しとはしないでしょう。

このように、成熟した市民であろうとすることは、そのまま現代における「本当の意味で道徳的な人」になるだろうと考えています。世界各国の学校では、「道徳」のような授業はあまりありません。(中国や韓国にはある)もし似たような教科を探すとすると、「市民性」「公民」「倫理」「哲学」などがあります。やはり「道徳」よりも大きな視点を持って教育を行っていることが分かります。

手続き主義とは

決められた法やシステムを守ることを最重要課題とする法治社会の基本的な行動原理

→ 社会を上手く回していくためには
「ブラックリストではなくホワイトリスト」
「法外の必要性」への理解が不可欠

さてここで、やっていいこととだめなこと、どのように決まっているのかを考えてみましょう。「法」「法律」「決まり」にも関わるお話です。

日本は法治国家です。人治主義のように指導者の気まぐれで裁かれたり許可されたりするのではなく、なるべく主観を排した「法律」「条例」「判例」などの決め事に則って社会システムが運営されています。そういう法治国家を運営するうえで必要になってくるのが様々な「手続き」です。役所での様々なやり取りが分かりやすいですが、社会の細部を回していくためには決まった流れで物事を進めていく「手続き」が必ず必要になります。公的なものに限って言うと、申し出る人によって、もしくはそれを受ける人によってやり方が変わるのは法治社会とは呼べません。

そういうわけで、「手続き」に則ること自体は当たり前の事で、否定すべきことではありません。問題は、それが社会の隅々まで、公共性が弱いものにまで浸みわたっているということです。こうしましょう、ああしましょう、ということがあらゆる場面で決められており、絶対のものとして守らなければいけない、変えられないと思われています。あまりそれが進むと、社会で生きていくことへの閉塞感が強くなるし、逆にルールに抵触しなければ何をやってもいいんでしょ、という変なルールのすり抜けも横行します。

本来、ルールや手続きといったものは、人々が暮らしやすくなるため、幸せに生きるために存在するものです。ルール、手続きを守ること(もしくはすり抜けること)が目的になってしまうと、本来の意味から大きくずれた実態になってしまいます。今の日本社会はそういう場面が多くないですか？一方的に押し付けられたルールや、ずいぶん昔から変わらない手続きによって生きづらくなっている人がいるなら、それは話し合っただけで変えていくべきものだと思います。

ここで言う手続き主義によってうまく社会を回していくためには、(つまり、理不尽な不幸を強いられる人を少なくするためには、ということです)「ホワイトリスト」という考え方、そしてルールよりも大切なものがあるということを知る必要があります。

ホワイトリスト

→ 「やっていい」と書かれていないことはやらない。
もしくは慣例に則る

ブラックリスト

→ 「やってはいけない」と書かれていないことは
やっていい。



道徳観念の必要性

ホワイトリストとブラックリストの説明をします。メールのブロック機能を想像すれば分かりやすいかもしれませんが。メールのブロックで言うと、そのリストに載っている人だけからメールを受け取り、リストに載っていない人からのメールは全てブロックする、というのがホワイトリスト。そのリストに載っている人からのメールはブロックし、リストに載っていない人からのメールはすべて受け取る、というのがブラックリストです。これを法律に応用すると、「こうしなさい」と書いてあることだけをやって、書かれていないことはやってはいけない、というのがホワイトリスト。もしくは慣例、判例、共通意識(コモンセンス)に則って行動する、というものです。「ダメ」とは書かれていないけれど、さすがにこれはダメだろう、という感覚で決めたり行動すること。反対に、ブラックリストとは、「ダメ」と言われていないことはなんでもやっていい、という考え方です。

ここで肝になるのが「共通感覚」「共通意識」というものです。英語で言うところのコモンセンスですが、つまりコミュニティの中で、これは守るべきだろう、という感覚のことです。養老孟司さんは「恥の感覚」とも表現していました。各コミュニティがそんなに大きくなく、自治がうまくいっている場合には、その感覚をみんなが持っており、そのコミュニティ社会はうまく回ります。しかし今の時代は自治体の規模が巨大になっているにもかかわらず(だからこそ?)個人個人は分断されている社会です。都会は特にそうでしょう。隣は何をする人ぞ、という言葉は全く当たり前のことになっています。結果、そのコミュニティ構成員の誰もが程度共用している「コモンセンス」は幻のように弱くはかないものになっています。

人々の「共通意識」に期待することができないなら、社会をうまく回していくために何が必要なのか。それが「ホワイトリストを基本にする」ということと、「法外を許容する」ということです。一見矛盾するように聞こえますが、何ら矛盾はありません。

人間は必ず間違えます。完璧な人間はいません。歴史は様々な間違いと悲劇を繰り返して今に至っています。その反省をもとにできた思想が「保守」と言います。(反語は「革新」です。「リベラル」ではありません。)長く続いたコミュニティの伝統や慣例を基本にし、物事を変える時には人間の不完全さを考慮に入れたうえで決定する、という考え方です。私たちはもう一度、この「人は間違える」という考え方を再確認する必要があると思います。だからこそ「ホワイトリスト」なのです。特に政治、官僚、司法、警察など、公共性の強い職業でまず守らなければいけない考え方です。

そして「法外の許容」の話ですが、ここで言う「法」とは「法律」のことだけではありません。どちらかというと「決まり事」+「共通意識」に近いものです。狩猟採集時代の後、大規模定住社会が始まるとともに「共通意識」や「その場の常識」が拘束性の強いものになっていきます。そうすると自ずと閉塞感が強まり、きれいごとや建前だけでは社会がうまく回らなくなってきます。その時にうまく人々のガス抜きをする役割を担っていたのが「祭り」です。祭りの時は「法内」と「法外」が逆転します。集団全体が法外に身を置くことで「仲間である」という意識が強まります。そうしてそのままでは立ち行かないことを宿命づけられている大規模定住社会が初めて維持できる形に変わります。「政治」の語源は「政(まつりごと)」です。もともと政治とは法外の行いなのです。官僚の行う「統治」とは違うということですね。社会学者のマックス・ウェーバーは、近代民主主義

では「法を守る官僚」と「法を破る政治家」がどちらも必要だと言います。社会がうまく回っているときには法を守る官僚が優位になります。しかし何か問題が起きたとき、基本的に官僚は変わることを嫌うので、そのままでは解決することができません。そこで政治家が社会の仕組み(プラットフォーム)を破り法外から変えていくことでうまく回っていくのです。もちろん、政治家の目的は「国民の幸せ」でなくてはならないことは前提です。「自分の利益」や「保身」を目的にする人は政治家になるべきではありません。

振り返ってみて今の日本はどうでしょうか。とてもじゃないですが、今の政権が国民全体のことを大切に考えているとは思えません。ブラックリストが横行しています。(野党の質問時間を削るもしくはまともに答えない、各メディアに圧力をかける、果ては強行採決を何度も繰り返す、など。文書や統計の偽造・ねつ造などは完全に犯罪ですけどね。)法律による国民への締め付けを更に強くし、弱者に追い打ちをかけようとしています。政権や与党が率先してブラックリストの考え方を進めている今の状況は本当に危険だと思います。それを見た人々が「それでいいんだ」と、自分の分野(経済界、教育界、スポーツ界その他)でも似たようなことに応用するだろうからです。そうやって社会全体が「道徳的に」悪いものになっていくのです。

なぜブラックリストが横行するのか。その背景があるはずですが、それはきっと新自由主義が進むにつれて広がってきた「うまく生きることの推奨」ではないかと考えています。「うまく生きること」と本当の道徳について考えてみましょう。

「うまく」生きるとは

損得勘定・効率主義

いかに少ないリスクでいかに多くのリターンを得られるか
というのが人生のテーマになっている状態

↑

新自由主義の台頭以来、奨励されるように

「金を儲けて何が悪い」などと言った実業家もいましたね。みなさんはどう思いますか。お金を儲けることは「道徳的に」悪いのか悪くないのか。

新自由主義とは、ケインズ経済学の「神の手」の部分が強力に推し進め、とにかく外部からのテコ入れを最小限にとどめて市場に任せればうまくいくんだ、という考え方です。イギリスのサッチャー首相、アメリカのレーガン大統領がそちらの方に舵をきって政策を進めていったために、世界に広まっていきました。グローバリズムとも非常に相性のいい考え方です。日本では小泉首相の時代よりその色が強くなっていった新自由主義ですが、それと共に浸透していったのが「効率」「等価交換」「バリュー」など、何でも価値(お金)に換算したり、自分(たち)にとって損か得かで判断したりするといった考え方でした。価値が見えにくく測れないもの(大学で言えば教養、中高では受験外科目の音楽や美術、もっと小さい子では遊びや隙間の時間。など)を低く見るという風潮が急速に広がった時代でもありました。

乱暴に言ってしまうと、お金儲けをできる人がどんどんお金儲けをすることによって経済が回り社会が発展していく、という考え方ですから、お金儲けは「良いこと」になります。お金儲けがどんどん推奨される時代です。勝ち組、負け組という言葉もお金があるかどうかの判断が大きい言葉でしょう。今現在でも「その何が悪いの？」と考える人も多いかもしれません。

しかしながら新自由主義には大きな落とし穴があります。それは地球の資源は有限だった、という事実です。新自由主義を推し進めて世界中の人が幸せになるためには、地球資源が無限である必要があります。しかし残念

ながらホセ・ムヒカ元大統領の言うように、世界中の人が自家用車を持つことは資源的にも環境的にも不可能なことなのです。資源もお金も有限であることがはっきりと分かっています。それが分かった上で新自由主義をよしとするということは、つまり格差社会、上下社会、弱肉強食社会をよしとするということと同義です。実はそういう社会は持続可能性が低いということで、相互扶助を基本とする社会よりも脆弱です。もろくて不安定な社会なのです。はっきりと言います。必要以上のお金儲けは「道徳的に悪い」ことです。つまり、社会的に弱い立場に立つ人の取り分を搾取しているからです。そういう社会は積極的平和とは言えない社会で、持続可能性も低いのです。

そうは言っても、この考え方は広く深く日本社会に浸透してしまっています。その一番の弊害は「うまく生きる」ことが最上の生き方と勘違いしてしまうことです。「自分(たち)だけが勝てばよい」「人よりいい目が見たい」「損することはしたくない」という考え方は本来浅ましいものです。もちろん人間ですから、少しでも自分の立ち位置がよくなるようにふるまうのは当たり前のもでもあります。でもやっぱり大人ですから、損得よりも大切なことを知っているはずで、人によって違うでしょうが、それが本当の意味での道徳ではないでしょうか。

「よく」生きるとは

損得勘定を超える自分なりの正しさとは何かを考え、その正しさに行動が伴っていることに達成感や満足感を持ち、自らの幸せにもつながっている状態

= 浅ましい人ではなく、立派な人、ひとかどの人物になる
尊敬する人物ようになる

そのことについて考えてみましょう。つまり「うまく」生きることではなく、「よく」生きることです。

「良い」状態といってもなんだかはっきりしませんね。宗教的に考えるとはっきりしています。信じている「神」がよしとする行動をとることです。しかしながら今回は道徳の講演会なので、倫理的・哲学的に考えてみましょう。

「良い」というのは誰にとっていい状態か。それは「自分にとって」いい状態のことです。自分が安心しており楽しんでおり納得している。それが「良い」ということです。決して「常識的にふるまう」ことや「道徳的に良いことをする」という外部からの評価ありきのものではありません。損得以上の高い次元で行動基準を持っており、それが自分自身の達成感や幸福感につながっていること。これが「よく生きる」ということです。おそらくそのように生きている人は一緒にいても尊敬できたり信頼のおける人が多いのではないのでしょうか。

ここでは自分なりの「正しさ」を持っているかどうか大きなキーポイントになります。それでは「正しさ」とは一体どういうことなのでしょう。

「正しさ」とは何か

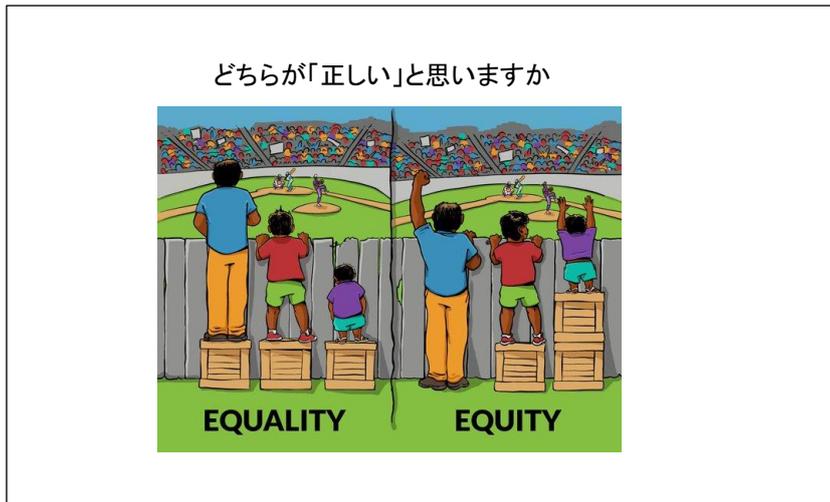
→ 法やルールを守ることではない

仲間や社会のために法を破ることができる

・尾畠春夫さん、宮沢賢治「毒もみのすきな署長さん」

時々「正しい」ということを「きちんとルールを守っていること」と勘違いする人もいます。「法律」「決められたルール」「常識」を守って規律正しく生きている人が正しい人だ、という理解です。しかしそれは部分的な見方でしかありません。むしろ「正しさ」というのは、いざという時にルールや常識を破ってでも人を助けることができるという心構え、とも言えます。そういう自分だけの基準を持っていて信念を貫くことができる人は、一緒に生きる仲間として信頼できる人でもあるでしょう。

2歳の行方不明児を発見したボランティアの尾島春夫さんは、以前の経験から、発見した後もすぐに警察に引き渡すことはしませんでした。警察に引き渡すことが必ずしも親子を守ることにはつながらないと分かっていたからです。手続き的には正しくない尾島さんの行動は、どう考えても「正しい」判断と行動だと思います。そういう行動ができる人を尊敬と信頼に足る人、といいます。



みなさんはこの画像を見てどう思いますか。左は「平等」右は「公正」と訳すことができます。平等はいつも正しいとは限らない、という分かりやすい画像ですね。象徴的な画像ですが、現実ではこれよりもっとひどいことが行われているのが現状です。その時に憤ることができるのか、是正しようとはたらきかけることができるのかも、正しさを持つということの一つの側面だと思います。

「仲間」とは誰のことか

- ・マイケル・サンデルの哲学
- ・アドラーの共同体感覚
- ・イエス・キリスト「隣人とは誰か」よきサマリア人のたとえ

最後に誰を守るのかという「仲間」について考えてみたいと思います。民主主義を考える時に何人規模の集団をイメージするのかが社会の回り方が全然違ってきます。みんなが直接政治に関わって納得して進めていける数は150人規模のダンバー数といいます。間接性民主主義がうまく機能する上限が2万人程度です。人の顔が見える、想像が及ぶ範囲ということです。しかし今の日本の自治体はそれよりもかなり大規模なところが多いです。地方自治がうまく回ってたり改善が進んでいる所はどこも小規模自治体です。実はマイケル・サンデルさんが提唱しているコミュニティ社会は、小規模のコミュニオンがたくさんあるというイメージです。そういうこともこれから考えていくことが必要でしょう。

しかし、仲間でなければ守らない、仲間でない人はどうなってもいい、という考え方は現代にあっては無責任な考え方だとも思います。意識的に世界は狭くなっているからです。想像の及ぶ範囲は昔よりもかなり広範囲になっています。インドネシアの地震と津波で犠牲者が多かった時も少なからず心が痛んだことと思います。コミュニケーション社会であることと、仲間を限定することは同義ではないと考えます。アドラーは仲間であることを「共同体感覚」という言葉で表現しましたが、その感覚はどこまでも広げていけると提唱しました。突き詰めれば人間という種族も越えて全ての生物にも感じるができるのだと。非常に理想郷的な考え方かもしれませんが、世界的な積極的平和を目指すためには必要な感覚だとも思います。

そして聖書にも「共同体感覚」を考えるうえで非常に示唆に富んだイエスのたとえ話があります。よきサマリア人の話です。ひどい重傷を負ったユダヤ人を助けたのは、裕福なユダヤ人ではなく地位の高い神官でもなく、敵対していた部族であるサマリア人だった。本当の隣人とは誰でしょう。というたとえ話です。

大切なことは「仲間とは誰か」を考えることではありません。人の痛みを想像できるのかどうか、ということです。人の痛みに対して無関心な人が増えたとき、どんな社会でも立ち行かなくなっていくます。

少し話はそれましたが、中盤のお話はこれで終わります。次は舞鶴幼稚園の保育に言及しながら道德についての理解を深めていくお話をしたいと思います。